

平成24年度文部科学省 がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン選定事業  
ICTと人をつなぐがん医療維新プラン

第2回 外部評価委員会

順天堂大学,島根大学,鳥取大学,岩手医科大学,東京理科大学,明治薬科大学,立教大学

評価	評価の基準
5	十分な成果をあげており、今の努力を継続すればよい。
4	かなりの成果をあげており、今の努力を継続すればよい。
3	一応の成果は認められるが、改善の余地がある。
2	十分な成果をあげているとは認めがたく、いっそうの努力が望まれる。
1	見るべき成果に乏しく、大幅な改善が望まれる。

(外部評価委員による評価)

平成26.11.22 外部評価委員会 実施

達成目標	評価指標	評価委員	評価	平均点	講評
ICTを活用し連携を深める	<定量的評価> ・7大学運営連絡会(年6回以上開催) ・e-learningを活用(共通科目11科目作成) ・ICTを活用し、双方向の授業を開催(共通科目年4回開催) ・共同授業カンファレンス開催(年5回以上)  <定性的評価> ・広域に渡る連携大学間の交流促進 ・双方向授業、共同授業カンファレンスによる遠隔地の教員・学生の情報共有・連携強化	委員A	4	4.3	今回挙げられている評価指標については、総てが順調に行われており、十分な成果をあげていると評価できる。但し、評価指標がアウトプット評価としてのものであり、アウトカム評価はどうなるかの視点も必要ではないかと思われるので、今後検討して頂きたい。  首都圏の大学と各地域の大学が本プランに参加し連携するためにICTが重要な役割を果たしている。評価指標(回数)からは、7大学の運営連絡会の他、e-learningの作成・公開、双方向授業や共同授業カンファレンスの開催にICTが活用されていることがうかがえる(昨年の評価委員Bのリクエスト「開催回数や参加大学数だけでなく、参加人数や参加研究室が参加学部・学部数に占める率も出してほしい」にも対応してもらいたい)。  広域にわたり地理的にも離れた各連携大学が、ICTやe-learningを有効に活用し、積極的に連携を深めていると考えられます。
		委員B	4		
		委員C	5		
循環型交流の実現をする	<定量的評価> ・連携大学間において同研究実施(5プロジェクト) ・共同授業カンファレンス開催(年5回以上) ・多職種コミュニケーション研修(合宿)毎年1回開催 ・教員の指導能力向上のためのファカルティ・ディベロップメントの開催(年1回以上) ・連携大学間の教員循環授業を開催(年7講義以上)  <定性的評価> ・臨床研究、臨床試験、国際共同臨床試験等への参加	委員A	4	3.7	ほぼ順調に進んでいるものの、連携大学間の共同研究プロジェクトや教員循環授業など目標に達していない項目もあり、さらなる努力が必要と考える。  共同授業カンファレンスが活発に開催されている(特に乳腺外科)。共同研究(5プロジェクト実施とあるが①～④しか記載がない!)は2つが進行中、1つが26年度に協議開始予定。臨床研究・臨床試験が特定の大学に偏っている。多職種コミュニケーション、教員の指導力向上のためのFDは着実に開催。人材の循環に関しては、専門薬剤師の育成に向けた薬剤師の循環が不足しているように思われる。循環型交流の実現は本プランのもっとも肝腎な部分であり、活動がさらに活発化することを期待。  連携大学間において、共同研究やファカルティ・ディベロップメントが積極的に開催されていると考えられます。一方で、専門性の高い理学・工学・薬学との連携という観点からみると、医学面での連携の強さと比較すると、今後のより深い連携が可能ではないかと考えられます。
		委員B	3		
		委員C	4		
地域との交流・均てん化の実施	<定量的評価> ・大学病院と地域病院間での共同カンファ開催(年2回以上) ・多職種コミュニケーション研修(合宿)毎年開催  <定性的評価> ・地域医療機関での実習実績 ・地域がん登録との連携	委員A	4	4.3	本プランの特色と言える首都圏と山陰と東北地方を結ぶ範囲の広い領域での地域との交流は易しくない課題と考える。そう言うものでありながら、徐々に進んでいることは評価するが、システムティックな体制作りを工夫することが重要ではないか。  山陰、東北ではそれぞれの地域の大学が中心となり、地域医療連携の取組みが着実に進められているが、取組みが各地域内で完結してしまっている感がある。均てん化の観点からは首都圏と山陰・東北地域との間の連携を深めることも重要と思うが、その点の取組みが手薄な印象。  ややもすると、専門医療者を育成するのみで、その後の地域がん医療の貢献が必ずしも明確でないケースもある中で、本プランの場合、専門医療者を育成するのみならず、育成した医療者を地域の医療機関やネットワークの中でどのように位置づけるかという点について、具体的かつ「顔の見える」ネットワークを構築しかつ成果を出しつつあることは、高く評価できると考えます。
		委員B	4		
		委員C	5		
国際化に向けた拠点センターの設置	<定量的評価> ・国際学会等での研究論文発表数(年間5件以上) ・海外の先進的な研究機関等への研修派遣(年間1名以上) ・海外の先進的な大学から教員を招聘し講義を開催(年3回以上) ・海外より招聘し、国際シンポジウムを開催(年1回以上)  <定性的評価> ・研究コーディネータの雇用 ・がん研究者の連携・共同研究の実施	委員A	3	3.3	更なる、努力が必要であろう。  国際学会等での研究論文発表が特定の大学に偏っている。昨年度までは、国際化＝研修生の米国派遣や欧米有名大学からの教員の招聘(それらにも一定の意義があることは否定しない)であった。国際化とは欧米の真似ではなく地域のニーズに即した先駆的で日本独自のモデルを構築し海外に普及することであると発想転換すべき。その意味では、昨年度指摘を受けてタイでの国際シンポジウム等が開催されるようになるなど改善が認められる。  国際学会等々での研究発表や海外の先進的な研究機関等との連携は、研究者や学生にとっては魅力的なことであり、かつがんプロや国内の大学等でも求められ、必要なことではありますが、地域医療への貢献を本プランの有力な特色と考えた場合、必ずしもプライオリティの高い内容ではないようにも感じます。そのうえで述べるならば、海外との連携という面に関しては、もう少しアクティビティを高める余地はあるように思いました。
		委員B	4		
		委員C	3		

(外部評価委員による評価)

平成26.11.22 外部評価委員会 実施

達成目標	評価指標	評価委員	評価	平均点	講評
がん診療への貢献・社会への情報発信をおこなう	<定量的評価> ・HP更新(月1回以上) ・一般向講演会の開催(年3回以上) ・活動報告書作成(年1回) ・ニュースレター作成(年4回)  <定性的評価> ・臨床現場との連携強化	委員A	4	4.0	臨床現場との連携は各大学で積極的に行われていると思われる。がんプロプランにおいては、一般国民の啓蒙啓発は非常に重要なことであり、特に岩手医科大学は非常に積極的に行っており、評価できる。
		委員B	4		様々な媒体(HP、講演会、活動報告書、ニュースレター)を通じた社会への情報発信が積極的に行われていることは評価できるが、昨年度評価委員Aの講評にある、それが一般国民や医療従事者にどれだけ浸透しているかの点検評価に関しては、今年度の自己評価のエビデンスの記載からは読み取れない。臨床現場との連携については、挙げられている内容がまちまちで、これで必要十分か否かさらに検討が必要ではないか。
		委員C	4		地域医療機関や患者団体との連携により、地域での医療者向けや市民公開講座を積極的に開催していることは、評価できます。今後は可能であれば、講演会の内容を記録、あるいは動画等で撮影し、ホームページを通じて記録の公開や動画の配信を行うなどすると、より広く社会に内容を発信できるものと考えます。
がん医療教育の充実を図る	<定量的評価> ・インテシブコースの設置(連携大学あわせて3コース) ・e-learningを活用(共通科目11科目作成) ・ICTを活用し、双方向の授業を開催(共通科目年4回開催) ・各コースの受入目標人数(平成24年度)に対する充足率100% ・認定看護師資格取得100%  <定性的評価> ・チーム医療の重要性を教育 ・実質的ながん医療人の教育 ・ファカルティ・ディベロップメント(ワークショップ)のプロダクト ・がん治療認定医の資格取得を推奨	委員A	4	4.3	各コースの受け入れ目標人数に対する充足率は一部の例外を除きほぼ100%と評価できる。また、がん医療教育の充実に向けての各施設における努力は評価できる。
		委員B	5		インテシブコースの設置や双方向授業の開催など、どの地域も積極的に取り組まれているが、具体的な成果が認められるのは認定看護師の取得率であり、同様の指標が他職種についても明確にされるともっとよいと思う。いずれにしても、教育の充実は人材育成の重要な柱であり、今後も積極的に推進してほしい。
		委員C	4		あらかじめ設定された養成目標数を、概ね達成しつつあると考えられます。一方で、医師以外の職種等の養成について、例えば特に不足が指摘されている医学物理士について養成人数を増やすことができないか、「ファーマシーサイエンティスト」の将来像についてより明確にすることが必要ではないかと考えます。また、教育内容にもより患者視点を取り入れることもできるのではないかと考えます。
がん研究の実施基盤の設置	<定量的評価> ・連携大学間において共通研究プロトコルの作成(5プロジェクト以上) ・がんに関する研究論文発表(年間5件以上)  <定性的評価> ・がん研究者の連携・共同研究の実施	委員A	3	3.0	がんに関する研究論文発表は順調に進んでいると思うが、連携大学間の共同研究の実施にはまだ課題が多いと言わざるを得ない。
		委員B	3		今年度は、東京理科大学のシードを臨床研究チーム合宿を通じて多施設臨床研究に繋げる取組みが見られるなど、一定の成果が認められる。しかし、「実施基盤の設置」=「実施体制の構築」の観点からは「学」だけの連携にとどまっておらず、出口(実用化)を見据えて産官学が連携するという発想は希薄に感じられる。基盤整備を進めるのであれば、ぜひ、各省予算の縦割りを打破し、産官学の協力まで視野に入れた体制を目指すべきである。
		委員C	3		地域医療への貢献やがん医療教育の充実などの項目と比較すると、現状では成果がまだ出てきていないように思われます。もちろん時間のかかることであり、またすでに共通研究の策定が進められているところですので、今後の進展に期待しています。
総合評価		委員A	4	4.0	ICTと人で繋ぐがん医療維新プランと非常に魅力的なテーマであり、その成果が期待されることである。首都圏と山陰と東北を結ぶ地理的に守備範囲の広いプランで難しいことは予測できるも、総合的には順調に進んでいると評価できる。しかし、今回の評価指標は全体的にアプトブット評価であり、今後は是非アウトカム評価を検討して頂きたい。
		委員B	4		がん研究開発拠点、国際化拠点、地域がん診療拠点地域力と多方面の取り組みを包含したたいへん意欲的なプランであるが、大学の使命である「研究」、「教育」、さらに医科系大学の使命である「医療」のすべての面に応えようとするあまり、取組みが総花的になっている印象は拭えない。本プランを通じて7大学がさらに交流を深め、高度な能力を備えた多数の人材を輩出し、がんという疾患の基礎から臨床までを高い水準でトータルにカバーする、広範な地域を結んだ1個のセンターのような働きが実現できれば、がん医療のブレークスルーに十分なり得ると思うので、さらにがんばってもらいたい。
		委員C	4		全体として、あらかじめ設定された目標について順調に達成しつつあると考えられ、特にICT等を発揚した連携の推進や、地域医療への貢献と均てん化という観点については、顕著な成果を出しつつあると考えられます。一方で、理学・工学・薬学との連携やがん研究の実施基盤の整備については、更なる強化が必要と考えられます。また、本プランにより設置されたがんに特化した講座については、より安定かつ継続した設置基盤が整えられるよう、期待しております。
全項目の平均値			3.9		